

物置小屋の恩人

紫李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

物置小屋に閉じ込められたジエーンは、マイケルに出会いました。

物置小屋の恩人

目

次

1

物置小屋の恩人

ジェーンは、遠い親戚に預けられると、物置小屋に閉じ込められました。

小屋には物が散乱し、使えるのは古びたベッドと空き箱のテーブルだけでした。

朝と晩だけ食事が運ばれてきます。

「ほらっ、めしだ。ありがたく食いなつ」

ワイフは空き箱の上に、一切れのパンとミルクを載せたトレイを置くと、

バタン！

激しくドアを閉めました。

ジェーンは手探りでパンを掴むと、口に含みました。

寂しくて、悲しくて、心細くて、ジェーンはその夜、眠れませんでした。

すると、ごそごそと物音がしました。

「！だれっ？だれかいるの？」

「こんばんは」

若い男の声がしました。

「だ、だれ？」

知らない男の声に驚き、ジェーンは後退りました。

「あ、驚かせてごめん。何もしないから大丈夫だよ。心配しないで。ドアが少し開いてたから入つて来ちゃったんだ。まさか、きみがいたなんて知らなかつた。だつて、人形みたいに静かなんだもん」

「……だつて、話し相手がいないもの」

ひびが入った窓から差し込む外灯が、ジェーンの哀しげな顔を照らしていました。

「あ、そつか。……でも、どうしてこんなところにいるの？ぼくですよ

かつたら話を聞かせて」

「……交通事故でパパとママが死んじゃったの。……そしたら、こゝに連れてこられて」

ジェーンの目には涙が光っていました。

「ぼくはマイケル。きみは？」

「……ジェーン」

「よろしく、ジェーン。また遊びに来ていいかい？」

「……わからないわ、私のうちじやないもの」

「あつ、そうか。そうだよね。じゃ、内緒にしよう。二人だけの秘密だ。ね？」

「……え」

一人ぼっちだつたジェーンに、話し相手ができました。

次の夜。ジェーンは、マイケルが来るのを心待ちにしていました。すると、

「よつこいしょ、つと」

マイケルの声です。

「あゝあ、重かつた。ね、ジェーン、箱の上に手をやつてみて」

ジェーンは、言われたとおりになると、そこには分厚い本がありました。

「点字の本だよ。これだつたら読書ができるだろ？」

「わあゝ、ありがとう」

ジェーンは嬉しそうにページを捲りました。

それからも、マイケルは色んな点字の本を持つてきました。

「マイケル、私のためにいつもありがとうございます。握手をさせて」

「あ、いや、ダメだよ。ぼく、さつき手を汚しちゃつたから」

「……そう」

「きみが喜んでくれて、ぼくも嬉しいよ」

「マイケル、……ありがとう」

学校にも行かせてもらえたかったジェーンは、マイケルが持つてき

てくれる点字の本で勉強しました。

そして、ジエーンは懸命に勉強をして、盲学校の教師になることができました。

マイケルとは一年前から会っていません。

それは丁度、ジエーンが教員試験に合格して、あの物置小屋から宿舎に引っ越す時でした。

ネズミが出るからと、ワイフが物置小屋にネズミ捕りの罠を仕掛けたからでした。――